

鳥居について

兼任恵彬

◎鳥居とは

神社の参道に建つ一種の門。

◎鳥居のいわれ

①古代インドで仏塔を囲む垣の門をトラーナと呼んでいたが、このトラーナの形や音が鳥居似ていたところからきたとする説。

②古代中国で王城や陵墓の前に建てる門の華表（かひょう）という文字に

トリイと日本語の訓をつけて神社の鳥居に解釈していたとする説。

③「通り入る」という言葉が転訛（てんか）したとする説。

④アマテラス大神の岩戸隠れるとき、ニワトリ（常世の長鳴鳥）を止まり木にとまらせて鳴かせたところから鶏居といい、これが鳥居に変化したとする説。

◎鳥居の構造

A. 神明鳥居系

①神明鳥居（伊勢神宮外宮など）

・最も原初的で素朴な鳥居。

・二本の柱と笠木および貫の四本からなるが、貫は柱の外側に出ない。

②鹿島鳥居（鹿島神宮など）

・貫の両端が柱の外につき抜け、くさびが打ち込まれている。

③八幡鳥居

・「ころび」といって、二本の柱が八の字のように下部が開く。

・笠木の下に島木が重なるように加わり、額束がつく。

B・明神鳥居系

①明神鳥居（八坂神社など）

・中世以後に始まり最も普及している。↓
神明鳥居が装飾的に発展

・柱に台石がつき、笠木には反増（そりまし）がつく。

②春日鳥居（春日大社など）

・反増が無く、多くは丹塗り。

③稻荷鳥居（稻荷神社など）

・島木と柱の間に台輪があり、丹塗り。

④山王（日吉）鳥居（日吉大社など）

・笠木の上に破風がつく。

⑤両部鳥居（梓指鳥居）（厳島神社な

ど)

・本柱の前後に控柱を添えて貫でつないでいる。

⑥三輪鳥居（大神神社など）

・左右にさらに鳥居を半分つけた形状。

千木と堅魚木について

◎千木とは

原始的な日本の建築様式である天地根元造りからきており、破風板の先端が棟のところで交差し、上に突き出た部分のこと。

◎千木のいわれ

①氷木(ひぎ)ともいわれ火を防ぐ意味であるとの説。

②茅屋の木あるいは違い木がつまっただものであるとの説。

③風木と書き風除けの意味であるとの説。

④獲物をかかげるためのものとする説。

◎千木の種類

A. 様式の違い

①本来の千木

垂木にあたる破風が伸びたままの古い形式のもの(伊勢神宮)。

②外削ぎ

千木の先端を垂直に切つてあるもので、一般的には男神を祀っていることを示している。(出雲大社)

②置千木

交差した二本の材を棟の上に載せた新しい形式のもの(出雲大社)。

本来の千木が装飾化されたもので、現在

◎堅魚木とは

ほとんどの神社がこのタイプ。

千木と千木との間の屋根の棟の上に、棟に対して直角に並べた木のこと。

B・形状の違い

①内削ぎ

千木の先端を水平に切つてあるもので、一般的には女神を祀っていることを示している。(伊勢神宮内宮)

◎堅魚木のいわれ

その形がカツオの干したものに似ているところからきている。

鯉木、勝魚木、葛緒木と書かれるこ

ともある。

◎堅魚木の本数

神社によって違い二本から一〇本
ぐらいまでで、奇数の場合は男神を祀
っている神社、偶数の場合は女神を祀
っている神社とされている。